

乃木將軍を挽す（杉浦重剛）

赤城熱血存餘瀝 松下遺風傳不言
心事明明還白白 神州正氣賴君尊

解説 作者が武人として敬重していた乃木將軍が、明治天皇大葬の夜、これに殉じて白刃したのを痛惜して作ったもの。さ行の「そ」の雙殉行（竹添井井）参照。

赤城の熱血 余瀝を存し

語釈 ※挽Ⅱ死を悼んで詩歌を作る。元は葬儀のとき棺を乗せた

松下の遺風 不言に伝う

車を引きながら歌う歌を挽歌という。※赤城熱血Ⅱ切腹した赤穂四十七士の忠烈をいう。※余瀝Ⅱあとに残した滴。今も残る影響。※松下遺風Ⅱ吉田松陰の松下村塾の教育の後世に残した影響。乃

心事 明明 還 白白

木は、伯父・玉木文之進に薰陶をうけた。玉木は吉田松陰の叔父であり、またその師でもあった。※伝不言Ⅱ教えなくても自然に伝わる。※心事Ⅱ心に思う事柄。※明明還白白Ⅱきわめて明白。※神州Ⅱ日本国の美称。※正氣Ⅱ万物の根本である純粹な気。

神州の正気 君に頼つて 尊し

通釈 將軍は赤穂義士が割腹したゆかりの地で生まれ、その影響

により忠義の心が厚く、伯父から松下村塾の教えをうけ、その感化により勤皇の志が深い。このたび、明治天皇に殉じて自殺を遂げたが、その心中はきわめて明白。わが日本に存する正気の尊厳が、將軍の殉死によりはつきりと世に知らされたのである。